



28代庄之助との交友(下)

小学校に軍配姿写真

鶴岡市朝陽六小の玄関陳列棚には28代木村庄之助(本名・後藤悟)が裁く姿の写真が飾られている。市内の小学校対抗相撲大会で団体優勝を飾ったチームに地元相撲連盟から贈られる恒例のものだった。市街地から旧郡部まで市内の各小学校には野外土俵がある。そこで練習に励んできたわんぱく力士たちに、鶴岡は行司の最高峰を生んだ土地であることをアピールしてきた。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため現在、相撲大会は開催自粛のまま。庄之助の在位期間は平成2(1990)年11月から



立ち合い正常化へ

年6場所90日、満員御礼

の丸3年間で右肩上がりの若貴(若花田、貴花田)チーム真っ最中だった。

が続き黄金時代を確固たるものにしたと大ナタを振るったのが若貴の伯父でもあった二子山理事長(元横綱初代若乃花)だった。栃若時代の一方の雄、栃錦の春日野理事長(7期14年)から禅譲のように昭和63(1988)年から2期4年間引き継いだ。新・両国国技館を完成させた春日野の存在もあって、自らも置き土産を残したいという気持ちがあった。それが土俵の充実であり、立ち合い正常化だった。鶴の

「た」した当事者に幕内1回10万円、十両5万円。月給が横綱280万円、大関230万円の時代だから、出せないことはない金額ではあったが、世間の常識からは高額そのものに映った。審判部長だった柏戸の鏡山親方も当惑したが「理事長が決めたことだから従うだけだ」と土俵上の両力士が呼吸を合わせ、仕切り線に手を付けた後、「待った」しないよう、厳しく見守ることになった。

金で解決情けない

行司たちは複雑な感情のままだった。立ち合いの裁きに罰金制度が導入されるのは自分たちの力不足を露呈したことにもなるからだ。「金で解決するというのは情けないことだ。一層努力して「待った」のない土俵にしたい」と庄之助は後輩の行司たちに言い聞かせた。学生相撲出身力士の台頭も立ち合いが乱れた要因だった。自分の呼吸だけを優

先させて、対戦相手との呼吸などはお構いなしの風潮だった。トーナメント戦の一発勝負に懸けてきた経験から立ち合いで相手をじらすのも戦法の一つだった。時代時代で、相撲の様式も変わっていく。柏戸の現役時代は立ち合いで仕切り線に手をつかなくても、両者の息を整えば、中腰同士でぶつかり合って、それが認められていた。

助と鏡山は互いに手をつく立ち合いを目指して、共同作業を行っていたことになく話した。「同じ部屋に泊まったがとにかく、イビキがすごかった。驚くほどだった。でもそれが大物感というものを生み出した。おおらかさというかね。横綱になった後も彼は力士仲間から評判が良かった。同じ時期に相撲界で過ごせたことは私にとって非常に幸運なことだった」。庄之助は晩年になっても、にこやかな笑顔で思い出を語るのだった。

業の先乗りで広島、安芸の宮島で遊んだ時のことをよく話した。

敬称略 (富樫 嘉美)

土俵の鬼迫力叱責

○二子山理事長は幕内のベテラン力士間にはびこっていた腐敗部分にもメスを入れた。八百長相撲の仲介役ではないかとの疑惑があり、巡業中も稽古をやらせず、悪い評判があった板井の追放がそうだった。平成3年、全ての関取を集めた

緊急会議で名指しで批判。「分かってるんだろ。な、板井！」から始まった土俵の鬼の叱責は他の関取衆も縮み上がるほどの厳しさだった。その後板井が引退、年寄襲名の届け出を出した日もはねつけ、相撲協会に残らせなかった。

毎週火曜日付に掲載



朝陽六小の玄関、陳列棚には庄之助の姿が